

神戸から来た男

登場人物

関口

ふさ

君

救急隊員 1

救急隊員 2

ふさの叔母

智史

坊主

大将

常連客

キャッチ

黒服

ホステス

ホームレス

警察官 1

警察官 2

1 路上

車に乗っている関口。

車の前には子供が倒れて、動かないでいる。

関口「あかん、あかん、あかん。あかんって。えー、やばない。これほんまやばない？」

関口、自分の頭を、自分のこぶしで何度も殴る。そして、ハンドルに突っ伏して、微動だにしなくなる。

関口、ふいに携帯電話を取り出し、

関口「あの、もしもし救急車お願いします。一あの一、子供をはねてしまって。一ええ、血、

出てます。一ええ、たくさん。一とにかく、至急、お願いします」

関口、電話を切り、車を降りる。

ゆっくりと子供の方に近づいていく。

そこへ、女性の叫び声が聞こえる。

女性、走って子供のもとへ。

ふさ「君ちゃん、君ちゃん」

子供を抱くが、反応がない。

関口「いま、救急車、お願いしました」

ふさ、関口を見ずに「君ちゃん」と呼びつづけている。

関口「すみませんでした」

関口、ハンカチを取り出す。

関口「あの、これ止血に使って下さい」

ふさ、関口をにらみ、ハンカチをぱっと奪い取る。

そこへ、救急車が到着する。救急隊員2名が降りてくる。

救急隊員1「関口さんですね」

関口「はい」

救急隊員1「警察は呼ばれました？」

関口「まだです」

救急隊員1「じゃあ、お願いしますね」

関口「はい」

救急隊員2「ご家族の方ですか？」

ふさ「はい、娘です」

救急隊員 2「救急車と一緒に乗ることもできますが、どうされますか？」

ふさ「乗ります。お願いします」

救急隊員 2「じゃあ、ちょっと待っててくださいね」

救急隊員 2「(無線で) 女兒、出血多量、心肺停止の恐れあり。一緊急手術の必要あり、ICU
の確保をお願いします」

救急隊員 1、2、担架で女の子を運ぶ。

関口「あ、もしもし、えーと。あの、子供をはねまして、ええ、国道沿いの、中央公園の前
です。一はい、私が加害者です。一関口といいます一下の名前は、一朗といいます」

救急隊員 2、救急車から戻ってくる。

救急隊員 2「それじゃあ、お母さん、ご同乗をお願いします」

ふさ「はい」

ふさ、救急車に向かうが、途中で止まる。

ふさ「(関口に向かって) 悪魔」

関口、呆然と立ち尽くす。

2 葬儀場

ふさの叔母、深々とふさに向かってお辞儀をする。

叔母「ほんとね、君ちゃん・・・(言葉につまる)」

ふさ「叔母さん、わざわざ遠くからありがとう」

叔母、涙が止まらない。

ふさ「叔母さん、君の顔、見てあげて」

叔母、うなづく。

ふさ、叔母の肩を抱きながら、一緒に棺桶のほうへ。

叔母、君の顔を見て、わーっと泣き声をあげる。

叔母「君ちゃん、きれいな顔してるね」

ふさ「うん」

智史「おい、そろそろお坊さん、来るぞ」

ふさ「はい」

坊主、外車でやってくる。

ふさ「よろしくお願いします」

坊主「この度は、ご愁傷さまでした」

ふさ「はい」

坊主「(智史に) ご主人様が喪主でいらっしゃいますか？」

智史「いえ、こちらが」

坊主「ああ、奥様が」

智史「いえ、あの、私たち離婚してるんです」

坊主「あ」

坊主「そうですか、それは失礼いたしました」

ふさ「段取りはどうでしょうか？」

坊主「えっと、私がまずお経を読みますね。その間に参列者のみなさまにご焼香をやっていただいで。お経を読み終わりましたら、喪主の方に挨拶してもらいます。そのあとに軽く説教ともうしますか、説法といたしますか、お話をさせていただきます。最後にお経を読んで、それでしめと申しますか」

ふさ「しめ？」

坊主「はい、それで終わりです」

ふさ「分かりました」

坊主「何人も見送ってきましたけどね、やっぱり小さい子ほどね、みなさんの悲しみも大きいものですね」

ふさ「…」

智史「3時からですね、また時間になったらお呼びしますんで」

坊主「ええ」

智史「(ふさに) おい、お茶とかお菓子とかないのか？」

ふさ「あ、はいはい」

智史「じゃあ、こちらにおかけになってお待ちください」

坊主「はい」

智史、去る。

ふさ、お茶とお菓子をもってくる。

ふさ「召し上がってください」

坊主「萩の月ですかあ、私これ好きなんですよ」

ふさ「はあ」

坊主「似たようなのが、全国各地にあるみたいですね」

ふさ「そうですか…」

坊主「中のクリームがほら、美味しいんですよ」

ふさ「…それじゃ、またお呼びしますんで」

坊主「ああ、いかんいかん、また与太話を。奥さん、気になさらないでくださいね。死人に口なし、坊主に口ありってね。これ、いつもなんで」

ふさ、愛想笑い。

ふさ「それじゃ、よろしくお願いします」

坊主「こちらこそ、お願いします」

3 葬儀場（最後のお経～控え室）

坊主 「(節をつけて) なーむあーんだーんぶーっ。なーもおあーむだーあああああああ
ああんぶーっ。なーむあーんだーんぶーっ。なーもおあーむだーあああああああ
あああんぶーっ。(一転、囁くように) 南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、
南無阿弥陀仏…」

坊主、お辞儀をして会場をあとにする。

控え室にて、坊主が待っている。

ふさ、智史、やってくる。

ふさ「本日はありがとうございます」

坊主「今日は一日、ご苦労さまでした」

ふさ、袱紗に包まれたお布施を取り出す。

ふさ「これ、少ない額ですが、お納めください」

坊主「これはこれは。それでは、ありがたく」

坊主、お布施の重さを確かめる仕草をする。

坊主、袈裟にお布施をしまう。

坊主「初七日、四十九日は、どうされますか」

ふさ「初七日はせずに済ませようかと」

坊主「そうですか…」

坊主「最近では省かれる方も多いですからねえ」

ふさ「ああ、そうなんですか」

坊主「四十九日は？」

ふさ「えーと、四十九日は日取りも含めて、また相談させてください」

智史「四十九日、するの？」

ふさ「まだ、分からないけど」

智史「でも、そんな言い方したら、するってことじゃない」

ふさ「しちゃいけないの？」

智史「いや、しちゃいけないなんて言ってないよ。言ってないでしょ」

ふさ「あんた、自分の子が死んだのに、亡くなったのに、四十九日するな、って言ってるの？」

智史「だから、するなどは言ってないだろ。そんな曖昧な言い方したら、お坊さんも困るじゃないかってことだよ」

ふさ「あとで日取り決めるのが、なにがいけないの？」

智史「そりゃそうだけどもさ」

坊主「まあまあ、お二人とも落ち着いて。それじゃあ、お待ちしてますからね、奥さんから連絡を。日取りも候補日をいくつか挙げていただいて、こちらも都合がありますからね。奥さん、それでいかかですか？」

ふさ「はい」

坊主「それから、これは宣伝なんですけど…」

ふさ「はあ」

坊主「今度、うちの倅が結婚するんですよ」

ふさ「ああ、そうですか」

坊主「その嫁がね、たしかミス福島かなんかに選ばれたとか」

ふさ「そうですか。それはおめでとうございます」

坊主「で、檀家さんを集めて、お披露目の会を今度9月の23日だったかな、やるんです」

ふさ「そうですか」

坊主「もしよかったら、是非来てください」

ふさ「ええ」

坊主「あの、詳しいことはね、お寺のホームページに書いてありますから」

ふさ「ホームページに…。はい、分かりました」

坊主「最近は何でもインターネット、インターネットだから。便利な時代になりましたよね」

ふさ「ええ」

坊主「私もね、つい最近ガラケーからスマホに換えたんですよ。スマホっていっても、簡単スマホとかなんとか、老人が持つやつですけど」

坊主「ほら、こう（手で操作の真似事をする）。すごいですね。あれ、感心しました」

ふさ「ええ」

坊主「何っていうんでしたっけ、（フリックする操作をしながら）こうやるの、何とかって

いうの」

ふさ「あの一」

坊主「はい」

ふさ「あの、そろそろ」

坊主「え」

ふさ「葬儀屋さんとの打ち合わせとかもあるので」

坊主「ああ、そうですね」

坊主「昔は、こう箒を逆さまにしたりね」

智史「ええ、そうですね（愛想笑い）」

坊主、立ち上がるが、お茶だけは急いで飲む。

坊主「ごちそうさまでした」

坊主「今日はありがとうございました」

ふさ「いえ、こちらこそ遠くから来ていただき、ありがとうございました」

坊主「それじゃあ、また明日」

ふさ「ええ、明日の朝 10 時によろしくお願いします」

智史、扉を開ける。

坊主「いいですよ、ここで」

智史「いやいや、下まで送ります」

坊主、智史、ともに出ていくが、ふさ、じっとしたまま動かない。

智史、戻ってくる。

智史「おい」

ふさ、送りに部屋を出ていく。

坊主、外車で帰っていく。

4 居酒屋

関口、通りを歩いている。居酒屋を見つけ、暖簾をくぐる。
お店には、大将、常連客がいる。

大将「いらっしゃい」

関口「一人なんですけど」

大将「ああ、お一人…」

関口「カウンターいいですか？」

大将「すみません。ちょっと今日、もう予約が入ってて」

関口「そうですか…」

大将「すみません」

関口、お店を出ていく。

常連客「今日、予約、入ってるの？」

大将「いやいや」

常連客「早めに切りあげた方がいい？」

大将「いや、違うんですよ」

大将「若い男の人で、いちげんさんは全部お断りしてるんですよ」

常連客「あ、そう」

大将「特に大阪弁の人には気をつけてるんです」

常連客「ああ」

大将「原発関連の人でしょ、ほとんど」

常連客「うんうん」

大将「出稼ぎで来てる」

常連客「あ、そういえば小百合ママも言ってたな」

大将「そう」

常連客「大阪の人はね、断ってるって」

大将「ここらへんの商店街の人は、みんなそうじゃないかな」

常連客「暴力沙汰とか、結構あるみたいね」

大将「そうそう、原発系の人は、みんなガラが悪いから」

大将「福島の人っておっとりしてるから、大阪弁でまくしたてられるとびっくりしちゃうみたい」

常連客「へえ」

大将「中にはガラの良いひともいるんでしょうけどね」

常連客「ガラの良いね…」

常連客「じゃあ。(徳利を持って) これもう一本」

大将「冷やもありますけど…」

常連客「うーん、冷やにしようかな。いや、やっぱ常温で」

大将「常温ですね。(奥に向かって) 日本酒、一丁！」

5 繁華街

キャッチ「キャバクラ、いかがっすか、キャバクラ、キャバクラ、キャバクラ。お兄さん、キャバクラ、いかがっすか」

何度も同じように訴えては、無視されている。

そこへ関口が通る。

キャッチ「キャバクラ、いかがっすか、キャバクラ、キャバクラ。キャバクラ、いかがっすか」

関口「君、面白い顔してるな？」

キャッチ「え、そうですか？」

関口「うん、してるしてる」

キャッチ「お兄さんは、かっこいい顔してますね」

関口「ほんま？」

キャッチ「あの、キャバクラ、どうすかね。可愛い子、たくさんいますよ」

関口「ほんまに可愛い子いるの？お兄さん、嘘ついてない？」

キャッチ「いや、ほんとっすよ」

関口「ぼったくり？」

キャッチ「いやいやいやいやいや。うち、そういう、全然怪しい店とかじゃないんで」

関口「そう」

キャッチ「どうっすか？今なら最初の1時間20パーオフになりますけど」

関口「どうしようかな…」

キャッチ「ほんとすぐ、なんなら1時間で帰っちゃってもいいんで」

関口「うーん」

キャッチ「あと、1ドリンク無料にしますよ」

関口「お兄さんが、そこまで言うなら、しゃあないな」

キャッチ「ほんとっすか？」

関口「うん」

キャッチ「じゃあ、ちょっと待っててください」

キャッチ、無線で連絡をとる。

キャッチ「—今から一名様、ご案内。—20パーオフのワンドリフリーで—了解」

キャッチ「じゃあ、ご案内します」

キャッチ「お兄さん、どこから来られたんですか？」

関口「神戸」

キャッチ「あ、神戸」

関口「うん」

キャッチ「俺、昔、淡路島いったことありますよ」

関口「あ、そう」

キャッチ「めっちゃ玉ねぎ、押してますよね、あそこ」

関口「あ、そうなん」

キャッチ「え、知らないんですか」

関口「うん、知らん」

キャッチ「玉ねぎスープとか、めっちゃ押してますよ」

関口「へえ」

キャバクラの前に黒服が立っている。

キャッチ「あ、ちょっと待っててくださいね」

関口、待っている。

キャッチ「お客さん、連れてきました」

黒服「あれ、大阪の人じゃない？」

キャッチ「いや、神戸らしいっすよ」

黒服「神戸も一緒だろ」

キャッチ「違いますよ、おしゃれタウンっすよ」

黒服「なにいつてんの、お前」

キャッチ「お願いしますよ。いい人そうなんで」

黒服、関口を見る。

黒服「(舌打ちし) 分かったよ、連れてきな」

キャッチ、サムズアップのポーズを取る。

黒服「早く！」

キャッチ「お待たせしました」

関口「なんか揉めてなかった？」

キャッチ「揉めてないっす。揉めてないっす。あの、可愛い子、お願いしといたんで」

関口「あ、そう。ならよかったわ」

キャッチ「ええ、それじゃあ、ごゆっくり」

と、キャッチ、ウイंकを贈る。

6 キャバクラ店内

関口、ホステスと座っている。

ホステス「お客さん、普段なにされてるんですか？」

関口「ああ、トラック、運送業」

ホステス「へえ、すごい」

関口「すごいことないよ、ただものを積んで運ぶだけやから」

ホステス「え、でも大型免許、持ってるってことですよ」

関口「うん、取ってないと、お縄になるからな」

ホステス「へえ、だって、私なんかオートマですよ」

関口「あ、そう」

ホステス「マニュアル乗れるだけでもすごいのに、大型とか、もう雲の上の人」

関口「はは、雲の上ね」

ホステス「マニュアルとか乗ったら、すぐ事故っちゃうと思う」

関口「…」

ホステス「お名前、というか、なんて呼んだらいいですか？」

関口「え？」

ホステス「下の名前とか、ニックネームでも」

関口「うーん。じゃあ、イチローでええよ」

ホステス「じゃあ、イチローさんってお呼びしますね」

関口「うん」

ホステス「イチローさんは、どこの人」

関口「神戸、じゃあ君は？」

ホステス「え、私。私は小さいとき引っ越してきてから、ずっと福島です」

関口「市内？」

ホステス「はい」

ホステス「じゃあ、甲子園とか近いんですか」

関口「うん、まあ。西宮やけどな」

ホステス「阪神ファン？」

関口「阪急」

ホステス「はんきゅう？」

関口「お姉ちゃん、阪急知らんのん？」

ホステス、うなづく。

関口「オリックスや、がんばろう神戸や」

ホステス「へえ」

関口「イチローとか田口とか知らん？」

ホステス「イチローは知ってる」

関口「振り子打法ね」

ホステス、首をかしげる。

関口「阪神は坪井」

ホステス「イチローさんは、お酒好き？」

関口「まあまあかな」

関口「あの、キャッチの子、おもろいな」

ホステス「ああ。でも、私、あの人、嫌い」

関口「え、でも気さくなええ子やん」

ホステス「だって、私たちのこと、なんか下に見てる感じがする」

関口「へえ」

ホステス「結局、あの人、私たちのおかげで食べてるのに。私たちのこと、将棋の駒かなんかだと思ってるみたい」

関口「そうか、そりゃ駄目やな。今度あったら、しばいとくわ」

ホステス「お酒、何にします？」

関口「じゃあ、これと同じの」

ホステス「焼酎の水割りですね」

関口「うん」

関口「女の子って、可愛いっていわれると、うれしいもんなん？」

ホステス「うーん、人によるかな」

関口「人によるって？言われる人」

ホステス「それもあるし。誰に言われても喜ぶ人もいるだろうし、人それぞれかなあ」

関口「そうか。そんなもんか」

ホステス「ネックレス、かわいいのつけてますね」

関口「ありがとう」

ホステス「私も、クロスはやつ、欲しいなあ」

関口「ほんま。じゃあ、今度プレゼントしようか」

ホステス「ほんと？」

関口「うん、たぶん」

ホステス「たぶん？」

関口「うん」

関口、いきなり自分の付けていたネックレスを外し、無理矢理、女の子につけようとする。

ホステス「え、どうしたんですか」

関口「ほら」

ホステス「酔ってます？」

関口「よく似合ってる」

ホステス「でも、これ男物ですよ」

関口「男物でもええやん」

ホステス「いや、ちょっと」

関口「よく似合ってるから、あげるわ」

ホステス「いやいや、駄目ですよ」

関口「…」

ホステス「今度、私に似合う、かわいいやつ、ください」

関口「(うなだれながら) うん」

関口、憔悴し、うなだれている。

黒服、牽制するように、二人のテーブルに近づく。

と、スマートフォンが鳴る。

ホステス「イチローさん、携帯」

関口「ん？」

ホステス「携帯、鳴ってるよ」

関口「ああ」

関口、携帯を取り出し、机に置く。そして、自身も突っ伏す。

ホステス、画面に子供が映っていることに気づく。

ホステス「かわいい」

関口「ん？」

ホステス「これ、イチローさんの子供」

関口「うん」

ホステス「めっちゃ、かわいい。ちょっとイチローさんに似てる？」

関口「ううん」

ホステス「私、めっちゃ、子供好きなんですよ」

関口「うん」

ホステス「実はこの仕事する前、幼稚園で働いてたんですよ」

関口「ふうん」

ホステス、スマホを取り出し、画面を見せる。

ホステス「ほら、イチローさん、見て」

関口「うん」

ホステス「ちえせんせい、ありがとうって」

ホステス「これ、見ると、元気でるんだ」

関口「うん」

ホステス「あと、私、今度甥っ子と大阪行くんですよ。海遊館とか」

関口「へえ」

ホステス「ねえ、イチローさん、美味しい店とか教えてよ、今度」

関口「…」

ホステス「イチローさーん」

関口「…」

ホステス「イチローさん」

関口「…」

ホステス「イチロー」

関口、急に起き上がる。そして、グラスを地面に叩きつける。

ホステス「え」

関口「うるせえ、子供みたいに呼ぶな」

黒服、近づいてくる。

黒服「あんた、何やってんの！」

関口「あ、やんのか、こら！」

黒服「ああ！」

関口「ああ！」

黒服「ああああ！」

関口「あああああ！」

黒服「おい、警察呼ぶぞ」

関口「いいよ、呼べよ」

関口、おとなしく座る。

黒服「(ホステスに) ちょっと、呼んで、警察」

ホステス、奥に下がる。

関口、黒服に殴りかかるが、返り討ちにあう。そして、ぼこぼこにされ、ソファに倒れる。

黒服「これだから、大阪の人は…」

関口、うずくまっている。

関口「六甲おろしに、颯爽と…」

関口、ふたたび立ち上がり、ボトルを握って、黒服の頭を殴る。

黒服、倒れる。

関口、店を飛び出す。

7 繁華街

関口、そそくさと歩いている。

キャッチ、再び現われる。

キャッチ「キャバクラ、いかがっすかー、キャバクラ、キャバクラ。キャバクラ、いかがっすかー」

キャッチ、関口に気づく。

キャッチ「(手を差し出しながら) お兄さん、どうでしたか？もう一軒、いかがっすかー？」

関口、キャッチの差し出した手を、パチンと叩く。

キャッチ、その反動で一回転ターンをする。

キャッチ「つれないなあ」

8 広場

関口、野宿をしている。

やがて、一人のホームレスがやってくる。

ホームレス、関口に近づき、そっとズボンのポケットから財布を盗む。

しばらくして、関口、起き上がる。

財布がないことに気づく。

関口「ない、ない、ない」

そして、ネックレスもまたないことに気づく。

関口「ない、ない、ない」

関口、自分の体を叩いて確かめて、財布もネックレスもないことが分かる。その後、両手をあげて、言葉にならない言葉を叫ぶ。

叫び声に気づき、警察官が二人やってくる。

警察官1「あの、ちょっとよろしいですか？」

関口「ない、ない、ない」

警察官1「ここで何してるんですか」

関口「ない、ない、ない」

警察官1「身分証か何か、ありますか？」

関口「ない、ない、ない」

警察官1「(もう一人に) ほら、ちょっと運ぶぞ」

警察官2「はい」

関口、ないと言いつづけながら、二人に運ばれていく。